

詩的言語の意味論的考察

——文学における言語の可能性とその限界——

磯 谷 孝

1° 形式主義の流れを汲むV・プロップはリンネの分類法に範を求めたが、一般に、分類と比較・対照は学問的方法の基礎をなすものである。その原理は種差 *differentia specifica* に基づいて対象を種と属の関係に系統づけることにあり、最近ソヴィエトの文学研究でよく用いられるタイポロジーという用語の概念も本来は同じ原理に基づくものである。もっとも、後者の場合は *universalia* の追求に主眼を置こうとする。タイポロジーの方法は発生論、歴史主義とは相対し、現実の現象を動かしている内在的機能の体系を探るようとする傾向が強まるとともに新しい方法論として迎えられるようになった。19世紀の比較言語学から20世紀の一般言語学への移行がその好い例といえよう。言語学におけるタイポロジー的方法は両者の過渡期である青年文法学派の方言研究の中から生れたが、ボドゥエン・デ・クルテネはその確立者である。この方法はロシアではまず形式主義文学研究の中に意識的に取り入れられた。シクロフスキーの小説のタイポロジー、ヤコブソン、トゥイニャーノフの唱えた「偏差の文体論」などがそれで、V・V・ヴィノグラードフも『文体論の課題』の中でボドゥエン・デ・クルテネの方言研究におけるタイポロジー的方法が文学研究に大きな意義をもちうることを確認している。ある一つの作品はそれで全一的な体系をなし、同じ作者の他の作品と相関しているが、この作者の作品は同時代、同流派の作家の作品と相関し、それらはさらに先立つ時代の作品と相関しうる。個別作品の *differentia specifica* がこうして確認されよう。この原理はプラハ学派の二項原理（示差的特徴による、文法的カテゴリー内の辞項の整理）や V. Skalička のタイポロジー研究にもつながっている。

ここで取り上げようとする詩的言語も、他の諸言語とのタイポロジー的連関のうちに考察する必要がある。諸言語といっても対する言語は日常的言語で、この両者がざっと言語全体を形成するものとしておこう。ロシアの形式派は一

般言語学の方法を取り入れようとしたことが一つの特色となっているが、それは詩が言語の一種、「特別に組織された言語」であり、言語に即して詩の本質を解明しようとするならば、言語一般の基本的性質、構造に関する知識が、当然、特殊な言語である詩の本質を説明するのに役立ちうるものと考えたからである。もちろん、逆も成り立つ。ヤコブソンはプラハ時代を振り返って詩的言語の研究が言語一般の研究を促がしたと述べているが、言語の機能構造論もその産物の一つである。エンゲリガルトは形式主義の原理を体系的に叙述した『文学史における形式的方法』⁽¹⁾の中で、言語を素材とする芸術である文学の本質を明らかにするためには、1. 一般に芸術というものの原理、2. 素材としての言語一般の本質、3. この言語がいかに芸術の言語となりうるか、を考察しなければならないと述べているが、正しい。エイヘンバウムはモスクワ言語学研究会、ことにヤコブソンの言語学偏向に対して、目的論的見地に立って文学研究と言語研究の相違を強調したが、⁽²⁾ 上記2, 3の兼ね合いが問題になったのであった。上記のごとく、タイポロジーの意義、文学性 *литературность* 研究における一般言語の研究の意義を確認したうえで次の問題に取りかかることにしよう。

2° 一口に言語といっても、それは色々な要素からなる体系の集合体であり、様々な角度から取り上げることが可能だが、一番大切なのはその記号性である。言語を記号として初めて体系的な叙述を完成させたのはソシュールの『言語学原論』⁽³⁾で、彼は言語学を一般に記号に関する学、記号学 *sémiologie* の中に位置づけようとした。「言語は観念を表現する記号の体系であり、……[色々な記号の]体系のうちもっとも重要なものである。」⁽⁴⁾「言語記号は物と名とを連結するのではない、概念と聴覚映像とを結合する。」⁽⁵⁾「……言語記号は[概念、聴覚映像の]二面を有する心的実体である。」「我々は概念と聴覚映像との結合を記号 *signe* と呼ぶ。」⁽⁶⁾「我々は記号なる語をもってそのまま全体を指さしめ、概念と聴覚映像との代りにそれぞれ所記 *signifié*, 能記 *signifiant* をもってすることを提議する。」⁽⁷⁾ このように成り立つ単位記号は他の記号と次のような二つの関係におかれる。一つは統合関係 *rapport syntagmatique*, 他の一つは連合関係 *rapport associatif* で、ソシュールは前者については、「……話の中で、語はそれらの連繋の力によって、かの2個の要素を一時に発音することを許さぬところの言語の線的特質に基づく関係をそれらの間に取り結ぶ。要素は言の連鎖の上に順ぐりに排列される。このような、支えとして拡がりを有するところの結合は、これを統合 *syntagme* と称することが出来る。……統合内

におかれる時は、辞項はそれに先行するもの、後続するもの、もしくはその双方と、対立することによって始めて価値を得る」^[8]と述べ、後者については、「他方、語の外において、何らか共通なものを示す語は、記憶の中で連合し、かくて多種多様の関係を含む群が出来上がる。……これらの同位排列は先のものとは全然類を異にする；これらは支えとして拮がりをもたない；その座は脳髓の中にある；それらは、かの各人のうちに言語を組み立てる内部の財宝の一部をなす」^[9]と述べている。言語記号に関するソシュールの命題は、良かれ悪しかれ、言語記号論の一つの範例となった。この記号学を押し進め、厳密で演繹的な言語理論の体系を構築しようとしたのがイェルムスレウである。彼はソシュールを「先達」^[10]として認め、その成果を踏まえつつ独自の理論を作り上げた。たとえば、ソシュールによると「統合関係は顕在である；それは現実系列の中に等しく現前する2個以上の辞項に基づく。之に反して、連合関係は陰在的記憶系列の中に潜在する辞項を連結する」^[11]ことになっており、このためにもすれば統合関係はその顕在性ゆえに *parole* と結びつけて考えてしまいきらいがあった。イェルムスレウは記号論の考察においてこの不手際を排し、連合関係をも顕現体としてではなく、可能態として同列に位置づけた。記号論におけるこの統合 Syntagmatic と系合 Paradigmatic の対立は、一般認識論的見地からは過程、体系という二概念の対立に帰せられ、いわゆることばのレベルでは、テキスト Text と言語 Language の対立になって現われる。^[12] この対立が分析全体を二分している。分析 Division, すなわち、単位の分析は、統合の面では区分、系合の面では分節となり、機能もそれぞれ連関と相関という用語で区別された。イェルムスレウによると、記号は脈絡的に意味づけられた全ての単位、たとえば文、節、語から語根、派生語尾、屈折語尾をも含む。^[13] さらに分析を進めると、やがては、たとえば、音素に到達するが、これは意味を持たないので記号ではなく、記号を形成する記号素 *Figura* と呼ばれる。^[14] 意味の担い手としての記号は表現と内容という二つの側面を持つ。ともすれば、記号は、それによって指示される外在的な実体と同一視されがちであるが、イェルムスレウはこれを排するために表現、内容ともに形式と実質に分け、記号は表現の形式、内容の形式の合一と見なし、表現の実質（たとえば物理的な音連続）、内容の実質（思考、事物、要するに指示対象）から区別した。^[15] 表現の形式の最終分割単位は音の *Figura* であるが、内容の形式も *ram=he+sheep*, *ewe=she+sheep* といった形で分割可能である。^[16]

イェルムスレウは言語の記号体系に関する理論が多くの学問領域にも適用し

うることを指摘してはいるものの、文学はもちろん他の文化領域についてもなんら具体的な考察は行っていない。¹⁷⁾ 大体、言語の事実から出発する というより、思考形式の整合性に重点がおかれているため、個別的事実は扱いにくいのが特色となっているのだが、その原則主義と演繹的方法は現在の記号論的文学研究に大きな影響を与えている。この派においては事実の説明よりも自己の理論の証明のための論述が多いのは、イエルムスレウの特徴が反映されているためといえよう。

3° 同じようにソシュールの影響を受けながらも独自の記号論を展開したのは、ロマン・ヤコブソンである。¹⁸⁾ 彼はモスクワ言語学研究会の主宰者で、ソシュールに関する体系的知識は主にカルツェフスキーを通して得ていたようである。カルツェフスキーは1907年ジュネーヴに移住し、ジュネーヴ学派と接していたが、1917～9年にモスクワに滞在し、ソシュールの紹介に努めた。ヤコブソンの特色は常に詩的言語の研究のなかから言語一般に関する普遍的命題を引き出してきた点にある。詩的言語の意味記号論的構造を体系づけたのも彼がはじめてであった。

形式派のシクロフスキーは『言葉の復活』の中で「……芸術の知覚とは、そこでフォルム……が経験されるところの知覚である」¹⁹⁾ と述べ、「芸術の目的は『知ること』としてではなく、『見ること』としてものを感じさせることである。また芸術の手法 прием はものを自動化の状態から引き出す異化 **остра-
нение** の手法であり、知覚を困難にし、長びかせる難渋な形式の方法である」²⁰⁾ と考えた。こうした立場を言語学的に明きらかにしたのがヤクビンスキーで、「日常的言語では単語の意味的側面（語義）が音の側面よりも大きな役割を果す。……このように……日常的言語では音には注意が集中しない……詩語ではこの事情が違ってくる。詩語におけることばの音は意識の明瞭な場に浮び上り、注意はそれに集中される……」²¹⁾ と述べている。ヤコブソンはこのヤクビンスキーの考えを修正、精密化した。「情動的言語と詩的言語においては言語表象（音声学的、意味論的表象の双方を含めて）は、より大きい注意を自体に惹きつけ、**音の側面と意味とのつながりはより緊密に、密接になり**、言語自体はそのためにより革命的になる。……表現をねらいとした言表にほかならぬ詩は、いわば、内在的法則によって支配される……日常的言語にも情動的言語にも固有の伝達の機能はここでは無に帰せられる」²²⁾ ものとした。ソシュールの概念と聴覚表象の結合からなる記号という考えをどう評価したかは定かでないが、注目すべきことは、**伝達の機能**という概念を取り入れ、それに**指示作用**、すなわち、記

号と（指示）対象との結びつき方を関連させている点である。この機能の強弱（日常的言語であるか、詩的言語であるか）によって記号と（指示）対象との結びつきが密になったりゆるくなったりする。ところでヤクビンスキーは音が強調されると意味の側面が背景にしりぞく、と述べたのに対し、ヤコブソンは、詩では言語表象がより大きい注意を自体に惹きつけ、音の側面と意味のつながりはより緊密になる、と述べているのは矛盾しているようであるが、実はヤクビンスキーの意味とヤコブソンのそれは性質の違うもので、前者は具体的な場における伝達内容としての意味（外的實在たる対象指示にもとづく意味）、後者は語（記号）そのものが持つ意義なのである。（それゆえ、ヤクビンスキーが意味的側面に語義としたのは、理解が足りなかったといえる）前者では指示作用が強く働き、後者ではそれが弱められる。音と意味からなる記号のほかに対象という概念が最初からどうしても必要とされたが、それをはっきり打ち出したのが『詩とは何か』²⁴であった。「詩の機能は記号と対象の同一性の欠除を指摘することである。なぜ我々はそのことを想起せねばならないか。その理由は、我々は常に *signans* と *signatum* の同一性を意識しながらも、同時にそれらの不相合の必要を感じるからである。この基本的な二律背反がなかったら記号と対象との結びつきは自動化し、現実感覚は消えてしまうだろう。」上で明らかなおとおり、ヤコブソンの場合、ソシュールと同様、記号=*signans*+*signatum*であるが、さらに対象との関係という要素がこれに加えられているのである。²⁴こうした「対象」を重視する考え方はフッサールの現象学²⁵によって裏づけられている。フッサールは思考の本質を明らかにするために言語の問題が大きな意義を持つと考え、表現機構の究明を試みた。彼は表現の根本的な使命である伝達機能を取りあげ、それが発話の媒介をする物理的側面、すなわち、音声複合と、話し手が「聞き手に伝達しようとする一つの意味をその音声複合に賦与する作用 *bedeutungsverleihende Akte*（あるいは意味志向 *Bedeutungsintentionen*）」と、言葉としての意味のほかにある具体的な場において具体的な対象に意味を関係づける作用、すなわち意味充実作用 *bedeutungserfüllende Akte*（この二作用は告知機能作用 *Kundgabung* に属するからなると考えたが、ソシュール、イェルムスレウと異り、**対象的關係** *gegenständliche Beziehung* に重きを置いていることが特色となっている。これはブレンターノ、ボルツァーノ等の認識論を引き継いだものであった。このフッサールの理論を更に発展させたのがカール・ビューラーの *Organonmodell* ²⁶ であり、ヤコブソンは後にこれをそっくり吸収して新しい言語の機能構造を組み立てた。いずれにせよ、

形式主義時代の初めから現在に到るまでヤコブソンの意味論、記号論を構成するものは、音、意味、対象の動態的關係である。²⁷⁾

以上は単位記号の成り立ちについて論じたのだが、記号と記号の関連についてはどうであろうか。この点ではヤコブソンはソシュールとほぼ同じ考えに立つが、実はクルシェフスキーの記号論から示唆を受けていた。²⁸⁾これを初めて芸術論の中に取り入れたのはパステルナーク²⁹⁾だが、ヤコブソンはそれをパステルナーク論で体系的に発展させた。すなわち、「詩は類似連合 *Ähnlichkeits-assoziation* に依拠するものであり、詩におけるリズムの類似関係は詩が受容されるための不可欠な前提である。リズムのパラリズムはそれが形象 *Bild* の類似ないし対立を伴っているときにもっとも強く感じられる。類似的分節への故意に際立った区分は散文には無縁である。物語は空間的あるいは因果論的道筋にそって対象からその隣接物へと動いていく。」³⁰⁾ また、これを言い変えて、メタフォア (=類似連合) にとって詩が、メトニミー (=接近連合) にとっては散文がもっとも抵抗の少いラインである³¹⁾ と述べている。この定式の特徴は言語の記号的本質を盛り込んだことと、詩と芸術的散文の相違を質的なものよりも、むしろ、量的に捕えようとしていることである。また、その不備は、たとえ類似連合に依拠しようとも文として表わされた時にはどうしても時間的、空間的継起、すなわち線状をなして記号が結合するという事実を無視している点で、後にヤコブソンはこれを修正し、「二つの等価的事項が文の相関せる二成分となり、したがって連接の關係で結ばれることになる」³²⁾ というメタ言語の考えを発展させ、「詩的機能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へと投入する」³³⁾ と規定しなおした。

4° 形式派によると芸術の目的はフォルムの知覚であり、したがって文学は言葉のフォルムの知覚ということになるが、それはいかに実現されるのであろうか。ヤコブソンによると「詩は美的な機能を帯びた言語」だが、この美的機能を明らかにするためには言語の持つ一般的機能がまず示されなければならない。フッサールと同じく形式派は、伝達の機能がそれであると考えた(本文62頁参照)。日常的言語では伝達の機能が前面に出て、言語の外にある外的実体に関する情報を伝えること、すなわち、内容の伝達が目的になる。形態的手段は出来るだけ目立たぬ方がよいわけで、ここから言葉の省略が生じる。つまり、伝達的手段は最小限の被知覚性を志向 *установка на наименьшую ощущаемость* することになる(伝達内容>伝達手段[表現手段])。³⁴⁾ 詩的言語では逆に伝達の機能が背景に押しやられ、外的実体、すなわち伝達内容そのものより

も表現手段が前面に押し出され、それが最大限の被知覚性を志向 установка на максимальную осязаемость する。⁸⁵⁾ ヤコブソンは表現をねらい(志向)とした言表にほかならぬ詩云々、と述べているが、これは伝達手段(表現手段)>伝達内容として図示できよう。このフォルムの重視が内容の無視につらなり極端化されると、「詩は言表の対象に関しては無関心である」ことになり、「難解なフォルム」、「むきだしの手法」といった考えが生れる。さて前項で、音、「意味」、対象の動態的な関係によって内容的意味(ヤクビンスキーの場合)と語の意味(ヤコブソンの場合)の二つを区別したが(ヤコブソンの記号=signans+signatum をソシュール流の記号=signifiant+signifié と混同すると、この区別が出来なくなる。記号の「意味」が対象指示性を強めると内容的意味が生じ、指示性が弱まって記号の被知覚性が高まると「意味」が語義としての要素を強め、音と密接に結びつくからである。これがほかならぬ記号の被知覚性であり、「詩的機能」が「指示機能」を凌ぐときに生ずる、「メッセージそのものへの志向」でもある。)、エンゲリガルトはこの両者を総合し詩的言語論の中に組み入れた。彼はフッサールにしたがい(もちろんずっと単純化して)、それぞれ全一的意味 единого-целостный смысл、名辞的意義 номинативное значение と名づけた。全一的意味は、伝達の機能あるいは指示作用が強く働くとき、外的実在に関する情報として現われるが、これがいわゆる内容を形成するものであり、従来の文芸批評家はこの内容(誰がいつ、どこで、どうしたということ)の評価、穿さくのみにならずさわったのである。その結果、フォルムの体験、すなわち литературность がなおざりにされた。名辞的意義は明らかに表現手段の中に組み込まれるが(本文62頁参照)、全一的意味はどうなのであろうか。記号の特色はその普遍性にあり、もとより語義と、語義を基にして指示作用によって具体的話の場で形成される内容的意味とは切離すことはできない。それに作品が具体的実在を指示しないにしても、作品には多少とも論理的意味が必要であり、それがなければ作品は脈絡のない単語と技法の集積と化してしまうであろう。したがってフォルムの被知覚性を重んずるために虚構としての内容的意味が二次的な位置におとされても、それは決して排除されるわけではなく、作品に統一を与える материал материал として表現手段のなかに入れられる⁸⁶⁾、というのが形式派の考えなのである。古くからある内容と形式の対立を形式派がどのように解決したがは、これで明らかである。服部四郎氏は「意味」⁸⁷⁾を 1) 発話における意味、2) 文における意味—意義、3) 単語における意味—意義素に分けて考えているが、形式主義者のいう伝達

内容（その疑似的形態である虚構の場合も含めて）は 1) に属し、語義は 2), 3) に属すると考えられる。詩的言語の テキストは 1), 2), 3) の結合のしかたによって外的実体の忠実な再現を志向する「自然主義」^[9]とか、「無対象性」*Gegenstandlosigkeit* ^[10]を志向するアヴァンギャルドの文学となる。詩の *ambiguity* は、とくに 3) が優勢になる場合であろう。こうして、われわれは記号を介してしか外界を認識できないことが分るが、このことは 1) 現実世界の反映としての記号体系の世界、2) 独自の記号体系の世界（たとえば、芸術的虚構の世界）という二つの世界の可能性をもたらす。ロトマンは前者を第一次モデル化体系、後者を第二次モデル化体系と名づけた。

では表現手段の最大限の知覚、音の側面と「意味」との密接なつながりはどのように実現されるのであろうか。この表現手段には音韻論的レベル、形態論的レベル、統辞論的レベル、構成上の諸技法などがあるが、それが芸術家の個性にしたがって一定の芸術的秩序のもとに置かれるのである。^[11]それが形式派の手法 *прием* でもあった（後にこれはフォルムとその機能という考えに取って代られる）。手法（あるいはフォルム）はある作品の中に位置づけられるとともに、ある国語の可能性たる諸手法（諸フォルム）の *fund* のなかにも位置づけられる。どんなに新しいフォルムも、その言語の一可能性として出てきたものである。また同一の、類似したフォルムでも、作品が異なれば、その価値は変ってくる。この価値を規定するのは作品全体の美的統一性である。この美的統一性は現象学派の美学者が考えたように、動態的なものとして受け止めなければならない。作品は作者、読者の双方にまたがって存在し、その言語空間は、個人によって言語系列、日常的系列の質が異れば、当然違った様相を呈するからである。また同一個人でも時間的経過において常に同一ではありえないからである。こうして作家、作品、読者、あるいは詩学と批評の関連性が問題になってくる。

5° 文学作品そのものよりも、その文学性を文学研究の対象に据えたヤコブソンはその後一貫してこの立場をつらぬき、チェコ時代を経て現在に到っている。構造主義時代の理論的集大成は *Linguistics and Poetics* であり、そのパラレリズム論の実証的研究が *Поэзия грамматики и грамматика поэзии* であったが、後者でヤコブソンは文法的フォルムの作りあげる《прекрасная необходимость》^[12]のなかに詩の美的統一性を見出したのであった。だがこの種の「美的必然性」だけが文学的傑作（なぜならば批評家も詩学研究家もなんらかの意味での傑作しか取り上げないから）の条件であらうか。バフチンのカー

ニヴァルの概念は言葉の限界をはみだして文化人類学的領域に踏み込んでいる。未来派の場合もそうであったが、凝った、外面的なフォルムは熱狂が納ったときには形骸化してしまうものである。巨匠は押し殺された、目立たぬ内面的なフォルムの構築に心する。志賀直哉の作品は言葉のアラベスクからは程遠いが、多くの人たちによって傑作とみなされている。さらにいわゆる「内容」の問題にふれるならば、ドストエフスキーの思想はそのフォルムなしにはもちろん文学たりえなかったであろうが、また逆に「思想」なしにはこれほどまでにもてはやされなかったであろう。こういうわけで、われわれは、まず文学の多様性を認識してかかる必要がある。詩は散文よりも *ambiguity* に富み、未来派の運動に発する「無対称性」の文学もあれば、「自然主義」のように指示作用の強い文学もある。それどころか、文学否定の文学、アンガジュマンの文学もあるこの頃である。つまるところ傑作の選択は個人の趣向、ルネ・ヴェレックの言葉でいえば「評価」に依存するものになる。詩学に出来ることはせいぜい、傑作の傑作性を分析して正当化することだけかもしれない。しかし評価も全く恣意的ではありえない。必ずや文学的伝統と、文化史、精神史のなかにそれとなく位置づけられたものとなるであろう。20世紀初頭のロシアにおける俗流社会学的批評家は「時代の文体」を唱え、ロラン・バルトも時代のエクリチュールについて語った。われわれはこうした被制約性を認めたくてフォルムの分析に取り組まねばならない。先ほど述べたとうり、フォルムは異った作品に用いれば異った価値をもちうることに注意する必要がある。作品はフォルムの単なる集積ではない。それらは全体的統一性の形成に与るとともに、逆にこの統一性によって規定されているともいえる。この統一性は何に起因するのであるか。それは、諸々のフォルムの発生体である作者自身にも求めることが出来ないであろうか。作者がその文学的人間像の一端、手がかりをのぞかせるのはマテリアルそのものと、その扱い方の態度、提示の仕方である。マテリアルの内容とその提示の態度は作者の人間像、世界観とを端的にあらわし、それとフォルムをつなぐ絆をなしているともいえる。作者はマテリアルとそれにふさわしいフォルムの選択によってある種の *commitment* を与える。こうして、フォルムの統一性、作品全体の美的統一を明らかにするためには作者の創作意図あるいは意識と選ばれたフォルムの結びつきの必然性（もともとの必然性がないにしても、作者において必然化されているところに意義がある）の究明も必要とされるのである。この問題をつとに挙げたのがヴィノグラードフの《образ автора》の考であった。⁽⁴⁾

- 注(1) Б. М. Энгельгардт. Формальный метод в истории литературы.《Academia》, Ленинград, 1927.
- (2) Б. М. Эйхенбаум. Мелодика русского лирического стиха. О поэзии. 《Советский писатель》, 1969.
- (3) ソシュール著, 小林英夫訳『言語学原論』。R. ゴデルの問題はここではふれない。cf. R. ゴデル編, 山内貴美夫訳『言語学序説』。勁草書房。
- (4) 同27頁。
- (5) 同91頁。
- (6), (7) 同91頁。
- (8) 同163頁。
- (9) 同163～164頁。
- (10) イェルムスレウ著, 林栄一訳述『言語理論序説』。研究社, 3頁。
- (11) ソシュール前掲書164頁。
- (12) イェルムスレウ, 28頁。
- (13) 同33頁。
- (14) 同34頁。
- (15) 同33～37頁。
- (16) 同50頁。
- (17) 同86頁以降。
- (18) Р. Якобсон. Новейшая русская поэзия, стр. 1. なお, Zeichen und System der Sprache (A. J. Greimas ほか: Sign, Language, Culture) でソシュールを批判している。
- (19) Б. Эйхенбаум. Теория «формального метода». Литература, Теория, Критика, Polemika. 《Прибой》, Л., 1929, стр. 555.
- (20) Виктор Шкловский. Искусство как прием. О теории прозы, стр. 11. 以上, 形式派の引用は, 「初原」№1. 「ロマン・ヤコブソンの詩学」(1970年12月15日), あるいは「ロシヤ語 ロシヤ文学研究」所収の同名の原稿で行ったものと重複するが了承されたい。
- (21) Л. П. Якубинский. О звуках стихотворного языка. Поэтика. Петроград, стр. 37, 38.
- (22) Р. Якобсон. Новейшая русская поэзия. 1921, Прага, стр. 10.
- (23) R. Jakobson. Co je poesie? Volné směry. Praha, str. 229—339.
- (24) cf. Zeichen und System der Sprache. S. 274.
- (25) Е. Фуссарль著 立松弘孝訳: 論理学研究2, 一, 表現と意味, 第6～9節参照。現象学が形式主義に与えた影響は大きい。表現に関するフッサールの概念が意味論にそのまま取り入れられているばかりでなく, 相互主観交流の考えはモスクワ言語研究会の論理実証主義の支えとなった。R. インガルデンの文学研究における積層法も構造主義に取り入れられている。「初原」№2 (1971年5月) ロマン・ヤコブソンの詩学(2), 120頁参照。

- (26) 自身も認めているごとく、ビューラーはフッサールから大きい影響を受け、それを発展させた。言語は記号であるという考えから出発し、まず「具体的発話事件」*das konkrete Sprechereignis* を設定し叙述、表現、呼びかけの三機能を分離、それを音響（記号の物理的側面）を中心にした送者、対象・事態、受者の間の関係によって説明しようとした。叙述は記号と対象との関係、表現は発話者の発話への意図であり、呼びかけにより受者に達する。*Linguistics and Poetics* にも指摘があるように、ヤコブソンはビューラーから示唆を受け、*speech event* を情報理論に基づきながら再構成した。cf. R. Jakobson. *Linguistics and Poetics, Style in Language*. p. 355, 磯谷孝『ロマン・ヤコブソンの詩学』ロシア語・ロシア文学研究 №2, 同初原 №2 参照。
- (27) LaP. では音、意味、対象は次のように扱われている。6つの機能の中で *a set (Einstellung) towards the referent* あるいは *referential function* が指導的な役割を担うが (p. 353), 詩では *the set towards the message as such, focus on the message* にほかならぬ詩的機能が支配的となる。すると「この機能は記号の被知覚性を促がすことによって、記号と対象の基本的なディコトミイを深める。」(p. 356) ただし、「指示機能に対する詩的機能の優越性は指示作用を消すのではなく、*ambiguous* なものにする」。(p. 371)。こうして「音と意味の内的な *nexus* は潜在的なものから顕在的なものになり、きわめて *palpable* に現われることになる」。(p. 373)。なお参考までに述べておくと記号体系としての言語の最小単位は、ヤコブソンの場合示差的特徴である。
- (28) Н. В. Крушевский. Очерк науки о языке. «Всякое слово связано с другими словами узами по сходству; [.....] Если, вследствие закона ассоциации по сходству, слова должны укладываться в нашем уме в системы или гнезда, то благодаря закону ассоциации по смежности, те же слова должны строиться в ряды.»
- (29) Б. Пастернак. Вассерманова реакция. 「初原」№.2 参照。
- (30) R. Jakobson. *Randbemerkungen zur Prosa des Dichters Pasternak, Slavische Rundschau*. № VII, S. 366.
- (31) *ibid.* なお *Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances (Fundamentals of Language)* にもそのまま取り入れられている。
- (32), (33) LaP. p. 358.
- (34) Б. Энгельгардт. Формальный метод в истории литературы. стр. 88.
- (35) *ibid.*, стр. 90.
- (36) *ibid.*, стр. 85.
- (37) 服部四郎『言語学の方法』, 意味論(1) p. 390; For Roman Jakobson, *The Analysis of Meaning*, pp. 207~211.
- (38), (39) R. Jakobson. Pasternak, S. 368. これについては昨年度のロシア文学会総会で報告したが、「初原」№.3 に『ヤコブソンの芸術記号論』として発表の予定。
- (40) Б. Эйхенбаум. Мелодика русского лирического стиха, стр. 332 「芸術作

品は常に様々な構成要素の複雑な闘いの結果であり常に一種の妥協なのである。これらの要素は単に共存し、相互に《対応しあっている》わけではない。スタイルの全体的性格にしたがって、ある要素は他の要素を支配し、それらを従属させながら構成的主調音（ドミナント）としての意義を担っている。」

- (41) Р. Якобсон. Поэзия грамматики и грамматика поэзии. 《Poetics. Poetyka. Поэтика》. Warszawa, 1961, стр. 408 ついでに Grammatical parallelism and its Russian facet, Language vol. 42, №.2 参照。具体的な作品研究には、《Les Chats》de Ch. Baudelaire, L' Homme 1962, tom. 2, №.1; Une Microscopie du Dernier Spleen dans les Fleurs du Mal. Tel-Quel 1967, 29; Shakespeare's Verbal Art in Th' Expence of Spirit. Mouton, 1970. などがある。
- (42) В. В. Виноградов. Наука о языке художественной литературы и ее задачи. Исследования по славянскому литературоведению и стилистике. М., 1960.